

科目名	<b>地理学の基礎 II</b>	科目分類	□専門科目群 ■総合科目群	
			全学科	□必修 ■選択
			学科	□必修 □選択
英文表記	<b>Basics of Regional Geography</b>	開講年次	■1年 □2年 □3年 □4年	
		開講期間	□前期 ■後期 □通年 □集中	
ふりがな	しのはら しゅういち	実務家教員担当科目	修得単位	2単位
担当者名	<b>篠原 秀一</b>	実施方法	■対面のみ □遠隔のみ □対面・遠隔併用	
授業のテーマ	地誌学入門			
到達目標	地誌学の基本的な考え方と世界地誌を理解し、現実社会を地誌学的に考えられるようになる。			
授業概要	世界地誌の基礎的内容と地誌学の基本概念を解説し、具体的な地誌事例から、地誌学を入門的に紹介する。以下を授業内容・枠組みの基本とする。 CAITLIN FINLAYSON (2020): 『World Regional Geography』全218p. (Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike4.0 International License)			
授業計画				
第1回	地誌学とは? (その1: 地域への興味/空間的観点/中心と周縁/環境)			
第2回	地誌学とは? (その2: 世界の諸地域/関連諸理論/全地球化と独自性)			
第3回	ヨーロッパ (その1: 自然と境域/協同と管理/産業革命)			
第4回	ヨーロッパ (その2: 移民/国家の自立性/近年の移民形態と論争)			
第5回	ロシア (自然/植民と開発/歴史/多民族主義/経済と発展/現代景観)			
第6回	北アメリカ (その1: 自然環境/歴史と植民/産業発展)			
第7回	北アメリカ (その2: 都市景観/不平等の諸形態/全地球との関わり)			
第8回	中南米 (地理的特徴/植民地化/都市発展/所得格差/全地球経済)			
第9回	中央・南部アフリカ (自然景観/植民地化/現代景観/全地球経済)			
第10回	北アフリカと西南アジア (その1: 地理的特徴/文化適応/諸宗教核心地)			
第11回	北アフリカと西南アジア (その2: イスラーム拡大/現代景観/宗教軋轢)			
第12回	南アジア (自然景観/集落諸形態/文化諸集団/人口変化型/未来可能性)			
第13回	東・東南アジア (その1: 自然景観/自然災害/歴史と定住)			
第14回	東・東南アジア (その2: 政治的軋轢と変化/経済発展の諸形態)			
第15回	オセアニア (自然景観/海洋と極地開拓/生物地理/集落形態/景観変化)			
第16回	定期 (期末) 試験			
授業時間外の学習	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の前日に、「授業計画」にあるキーワードから、授業内容を自由に想像してみてください。(0.5時間)</li> <li>2. 授業後、基本的な内容について、自らの講義ノートと授業資料により復習し、自らの自由な想像を修正してください。(1.0時間)</li> <li>3. 日常的に時々、身の廻りを地誌学的に観察してみてください。(0.5時間)</li> <li>4. 身の廻りも含め様々な地域スケールで、世界の現状を新聞やニュースで確かめ、社会的課題を地誌学的にも考えるように心掛けてください。(1.0時間)</li> </ol>			
履修条件 受講のルール	履修条件：特にありません。 受講のルール：「地理学の基礎II」は地誌学入門（世界地誌と自然地理の一部を含む）、「地理学の基礎I」は人文地理学入門です。本格的な自然地理学入門講義は「自然と地理」です。			
テキスト	特にありません。講義中に資料を配付します。			
参考文献・資料	講義中に適宜、紹介します。できれば、帝国書院か二宮書店が編集した本格的な（学習）地図帳（日本・世界編）を手元に置き、参照しながら授業を受けてください。			

成績評価の方法	総合評価：期末試験 75%、ミニレポート 25%。ミニレポートの課題は授業全体の中盤で指示します。 ※出席回数が規定に満たなかった場合及び授業料その他納入金等の全額を納めていない場合は試験を受けてミニレポートを提出することができません。また、出席確認時に不在だった場合には、原則としてその授業回は欠席と見なします。授業中に未許可で退出した場合には、欠席と見なします。
オフィスアワー	講義時間（後期水曜日 1・2 時限）前後
成績評価基準	秀(100～90 点)、優(89～80 点)、良(79～70 点)、可(69～60 点)、不可(59 点以下)
実務経験及び実務を活かした授業内容	仮に、実務経験があれば、授業内容はより理解しやすいはずです。
学生へのメッセージ	折角ですから、「地誌学」を楽しみ、一生、好きになってもらえる契機となれば、幸いです。